

Computer Report

Vol. 51 No. 2 2月号 (通巻 677号)

はじめの言葉

■円高不況だ、株価の低迷だのと、経済的に失速した日本企業の現状を、政府頼りに声高に騒いでみせるマスコミの喧噪には、正直食傷気味である。円高を諸悪の根源のように叫ぶが、果たしてそうだろうかと思う。むしろ、円安で海外からものが買えなくなってしまった方が、より深刻ではないかと思う。何を根拠の円高否定論なのか理解に苦しむ。そんな中、日本の国債評価レベルがアメリカの格付け会社によって下げられたと大騒ぎである。

■通貨の為替レートが低い国の国債評価レベルが高いということは、果たしてあり得ることだろうか。通貨の為替レートが高すぎると不平を一方で言いながら、国債評価レベルだけは高くしておいて欲しいようなことを言う。素人判断でもおかしいように思える。こういうマスコミ解説を聞いていると、まともに聞いているほうがおかしくなる気がする。マスコミが信じられなくなって当然のように思える。

■実に、マスコミ不信はすでにかかなり浸透していると言っていいだろう。特に、若い世代を中心に、既存マスコミ離れは急速に進んでいると観ていいようだ。まず、新聞の個人宅での定期購読はほとんどの若者はしなくなってきたという。NHKの強制的な受信契約も、していないという若者世代が増えている。理由は、共働きの若い世代の夫婦など、ほとんどテレビ自体を観ないというケースが多くなってきているようだ。

■聞くと、新聞、テレビのニュースなどは、携帯電話やPCでインターネットから入手することで事足りると答える。確かに昨今、満員の通勤電車の中で新聞を小さく折って読んでいるのは中高年以上がほとんどだ。正確には、高年サラリーマンがほとんどである。ワンセグ番組などを見ている若い世代が目につくし、車中ではイヤホンを入れている若者世代の割合が多い。

■古い世代の証明かもしれないが、テレビ番組を見ていてウンザリするのが、お笑いタレントと称する連中が、お笑い話ではなく、身の上話をしてバカ騒ぎをして見せる番組が多すぎることである。もしかすると、それが彼らの得意とする持ちネタなのかもしれないが、これも視聴者をして、大いに既存マスコミからの撤退をさせる原因だろうと思う。まさに、私生活ネタで他人を笑わすしか能がない芸人など、まったくのお笑い草である。

■マス(大衆)を対象にニュース情報を知らしめることで、誰もが知っている状態にするという使命、そしてそれを実現してきた既存のマスメディアの力は賞賛されるべきである。ニュース情報の種類によっては、今後ともその役割への期待には大きいものがある。しかし一方で着実に、若い世代が、その視聴から遠ざかってきているという事実は重い。代替するメディアが登場してきたというだけの意味ではないと考えるからだ。

■情報には、誰もが知っている情報だということで価値があり、誰もが知りたいということで価値が出る情報がある。その一方で、極く限られた範囲にしか知られていない、誰もが知らないからこそ価値があるという情報もある。視聴する側も極端で、誰もが知っていることだけを知っていたい人々と、誰もが知らない情報だけ入手したいと考える人がいる。溢れかえる情報洪水をどう捌くか、情報社会における課題は一杯ある。(藤見)